

日本漢音における止摂合口字音の受容に見られる位相差

佐々木 勇

一、問題の所在

止摂合口字「水・垂」「追・隊」「墨・累」等の字音仮名遣いは、本居宣長『字音仮字用格』(一七七六年)以来、白井寛蔭『音韻仮字用例』(一八六〇年)などでも、「スキ」「ツキ」「ルキ」とされている¹⁾。これは、右の諸字が『韻鏡』で「合口」に配されているためである。江戸時代には、平安時代初中期の漢字音仮名表記例を得ることが難しかったため、『韻鏡』による演繹法がとられたものである。しかし、これが、『韻鏡』による演繹法としても不統一であることを、大矢透『韻鏡考』(一九二四年)は、説いた²⁾。

それよりも早く、岡井慎吾『漢字の形音義』(一九一六年、六合館)は、この問題に触れている。ここでは、具体例は挙げないものの、「輓近古写経研究の結果はクの下にのみキを用ひたれども、その他のウ段の下はイなりとするを穩当とすべきに似たり。」(二二三頁)とまとめている。さらに、満田新造は、『法華経單字』・

『法華経音訓』・『新訳法華経音義』・寛文十一年版『太平記』および金沢文庫本『群書治要』における具体例を挙げ、実際には、止摂合口字に「スイ」「ツイ」「ルイ」等の仮名が付されていることを指摘した³⁾。

その後の字音仮名遣いの研究においても、満田の主張が受け入れられ、漢和辞典・古語辞典における止摂合口字(牙音字「貴」「帰」「鬼」等を除く)の歴史的な字音仮名遣いも、改められてきている。

このような状況を反映して、沼本克明は、今日採用されるようになった字音仮名遣いの改訂点の第一点に、これを挙げている。そして、「宣長の字音仮名遣いで、呉音・漢音共に水スキ・追ツキ・墨ルキ・唯ユキと「一キ」とされていた字は、古代文献で例外なく水スイ・追ツイ・墨ルイ・唯ユイと「一イ」で表記されている、とまとめた⁴⁾。

1. すでに指摘されている「スヰ」「ツヰ」等の付音例

しかし、まったく例外が無いわけではない。訓点資料・辞書・音義に、少数ながら、「スヰ」「ツヰ」などの表記例が存すること
もまた、一方では報告されている。

まず、築島裕『平安時代語新論』(一九六九年)四二二頁には、
一三四年加定の「蒙求」における「墜ッヰ」の例が挙げられて
いる。次に、高松政雄「臻撮合口の字音」(一九七六年)では、こ
れに加え、左の「類聚名義抄」における例を挙げ、その他、三卷
本「色葉字類抄」に若干例があり、東大本「法華経音義」および
浄土真宗伝承音にシヰの例があることが言われている。

綾 音義スヰ(図書寮本名義抄)

錐・雖 音佳スヰ(観智院本名義抄)

また、神田本『白氏文集』天永四年(一一三三)点にも、次の
例が指摘されている。

郷(上)公(三80) 椎(上)一(警)鬚(上)(四83)

さらに、先に引用した沼本自身も、次の例を挙げている。

墜ッヰ(後筆) (長承本)「蒙求」

蕤ッヰ(二例) (文鏡秘府論保延点)

時代が降つても、室町時代の静嘉堂文庫蔵「毛詩」清原宣賢加
点本における、三例が注意されている。

蕤(四98) 綏(五85) 鯨(九38)
そして、このような例の出現理由を、沼本克明は、つぎの通り
に述べている。

これ等は概ね漢音資料であつて、悉く漢音の原音性の保存に
由来する表記上の揺れであつたと考えられる。

(沼本克明「日本漢字音の歴史」、一七九頁)

これらの表記が、「漢音資料」において「原音性の保存」のため
に生まれた、という右の指摘は重要である。

2. 先学の音価推定

この止摂合口字音の日本漢字音における音価については、奥村
三雄による次の記述が、一般的な考え方を反映しているであろ
う。

カ行以外の合拗音は発達しなかつたらしい。たとえば、
swi・twi……の字音も、「倅スヰ反」(天智度論天安八八年
や、「墜豆以」(小川本華嚴經音義跋記)の如く、古くから二拍的に表
記されている。(中略)前記「墜ッヰ」の如きを、「キーイ」の混
同例と見なす事は、時期的にも無理なのである。「スヰ・ツ
ヰ」などの表記は、前記「スヰ・ツイ」表記より余程おくれ
たらしく、「屯ッヰ」(史記孝文帝紀二〇七年)や、「恂スヰ」(高

僧伝二六三年)など、院政期頃の例を古しとするのである。
韻学知識に基く規範的表記と見るべきであろう。

『講座国語史2 音韻史・文字史』(一〇八頁)

すなわち、「スヰ・ツヰ」などは、院政期以降の「韻学知識に基
く規範的表記と見るべき」であり、音価はスヰ・ツイと変わらな
かつた、という考えである。いま、かりに、サ行・タ行の子音を
それぞれs・tで記せば、スヰ・スヰは、ともにswi、ツヰ・ツ
ヰはともにtwiであつたということになる。

これに対して、小松英雄は、「平安初期の訓読テキストでは、こ
れらの文字の音注がスヰ/ツイになっているが、平安末期にはス
ヰ/ツヰに移行している。」と指摘した上で、次のように説明し
ている。

概略的に言うなら、日本字音化した「水/追」の語形は
swi/twiであつたと推定される。そういう構造の字音を片仮
名でそのまま写すことはできないので、近似的に表記する工
夫が必要であつた。

中国字音は単音節であり、日本字音もその特徴を基本的に
継承したが、swi/twiなどの音節を一つの仮名で置き換える
ことはできないから、二つの仮名で表記された。これらの字
音の場合は、「swi」を「swi」に置き換え、swi/twiという切り

日本漢音における止摂合口字音の受容に見られる位相差

かたでスヰ/ツイと表記された。ただし、それは、表記上の
工夫であつて、表記に合わせて字音の語形まで変えたわけ
はない。
それまでスヰ/ツイと表記されていた字音の表記は、平安
末期になると、語頭子音に片仮名ス/ツを当て、「swi」に片仮
名キを当てる転写方式に転換された。それが、スヰ/ツヰで
ある。この表記のほうが合口の特徴を顕現できたからであろ
う。

そして、「要するに、スヰ/ツイからスヰ/ツヰへの移行は、日
本漢字音史の問題ではなく、漢字音の仮名転写の問題であり、韻
学との関わりは歴史である」とまとめている。

この小松説は、その音価は、「swi/twi」のままであり、「転写
方式」が転換したと考える点が、奥村説と異なる。

3. 本稿の目的

以上、これまでの研究成果を概観すると、次の点が疑問として
残る。

「スヰ」「ツヰ」等の仮名遣い例は、沼本が言うほど例外的では
ない。しかし、小松が「平安末期にはスヰ/ツヰに移行してい
る」と言うほど、当時一般的でもない。「漢音資料」において「原

音性の保存」のために生まれたと考えられている「スキ」「ツキ」等の表記は、どの程度の広がりをもつのであろうか。

また、「スイ/ツイ」と「スキ/ツキ」との表記が並存する時代には、両者に発音の相違はなかったのであらうか。

そこで、左の二点を解決することを本稿の目的とする。

A 一つの、どのような文献に、どの程度、スキ等の表記が見られるのか？

B 表記の相違は、発音の違いを反映していたのか？

二、スキ等の用例

まず、「スキ」「ルキ」等、—ルキの例を記す〔文鏡秘府論〕保延点に見られた「蕤^{シキ}」等、—ルキのものは、後述する。

現在指摘されている中で、止摂合口字の仮名を「スキ」「ルキ」とする最古の例は、図書寮本『類聚名義抄』院政期点（一一〇〇年頃）のものである。

それよりも早い例を見出すべく、平安時代の訓点本を検索してみたが、管見の範囲で、未だ用例が見られない。

それ以降の例として、次のようなものを見出せた。以下、出現例の多い順に、『漢籍訓読資料』『古辞書』などと分類して掲げる（先行研究に指摘されている例も再度記す）。

蕤^{ルキ}へ力危反^{ルキ}（二〇三七）

東大寺蔵『帝範』巻上 弘安五年（二二八二）点

（康平三年中江匡房の加點本奥書を持ち、菅原資高以下の伝了奥書を有す）

立錐之地（78）

東洋文庫蔵『論語集解』正和四年（二二二五）写本

（清原家点加點されている）

誅^{ルキ}へ力軌反（以下略）（四一三六） 綏^{ルキ}へ音錐^{ルキ}（五二五〇）

大東急記念文庫『論語』巻第一く第六建武四年（二二三七）点

（清原家点加點されている）

壘^{ルキ}へ（□□）（力軌か）反（一一二）

誅^{ルキ}にへ力鬼反^{ルキ}（略）へ（略）誅^{ルキ}は（略）（四一三）

高山寺蔵『莊子』乙卷 南北朝期点（藤原家の加點かと推定されている）

覆^{ルキ}へ（入聲）—墜^{ルキ}へ直類反^{ルキ}（二二六八三）

静嘉堂文庫蔵『毛詩』清原宣賢加點

離^{ルキ}（九三四） 離^{ルキ}（四六七割注・一三三割注・九三五割注・三八）

離^{ルキ}（二〇一七） 綏^{ルキ}（五八五） 榘^{ルキ}（二〇一八割注）

對^{ルキ}（直類反）（二八一九） 對^{ルキ}（同二一割注） 藟^{ルキ}（四九六・九八）

藥^{ルキ}（一六三六割注）

書院部蔵『春秋経傳集解』卷第二 永正十七年（二五二〇）清

原宣賢加點

日本漢音における止摂合口字音の受容に見られる位相差

1. 漢籍訓読資料

神田本『白氏文集』一一一三年点

椰^{ルキ}上公（三三〇）

山岸文庫蔵『史記』第十一 大治二年（二二二七）写本¹²

嘉^{ルキ}（一）卒^{ルキ}（一一）

書院部蔵金沢文庫本『群書治要』子部 文応元年（二二六〇）点

（藤原敦周・敦綱・敦経の祖点部分に限られる）

工^{ルキ}平懸—僅^{ルキ}（三七二六八） 椎^{ルキ}（三九五七）

篋^{ルキ}（平）—楚^{ルキ}（四二九八） 筆^{ルキ}—楚^{ルキ}（四四二一七）

捶^{ルキ}上—杖^{ルキ}（四五三三）

書院部蔵『春秋経傳集解』文永六年（二二六八）点

（以下、小書きをへへに入れる）

綏^{ルキ}へ荀佳反^{ルキ}（二四三九） 蕤^{ルキ}へ人誰反^{ルキ}（二四四一）

炊^{ルキ}（平）へ昌垂反^{ルキ}（二五五三） 離^{ルキ}へ音佳^{ルキ}（三三〇五五）

錐^{ルキ}へ音佳^{ルキ}（二二五三二） 鷓^{ルキ}へ音佳^{ルキ}（二二五三三）

離^{ルキ}（平）へ音錐^{ルキ}（二二三三六） 垂^{ルキ}（三三五）

藥^{ルキ}（上）へ而捶反又而水反^{ルキ}（二二九一〇〇〇）

離^{ルキ}（二五四三割注） 隊^{ルキ}へ直類反^{ルキ}（二二三七〇） 隊^{ルキ}（同、割注）

絶^{ルキ}へ丈偽反^{ルキ}（七四一三） 絶^{ルキ}（同、割注）

壘^{ルキ}へ力軌反^{ルキ}（二七一一七割注） 誅^{ルキ}へ力軌反^{ルキ}（三三〇二五）

趙^{ルキ}へ翠軌反^{ルキ}（六七〇七）

蓬左文庫蔵『毛詩』室町末期点 清原宣賢点本の移点本

離^{ルキ}（四六一割注） 離^{ルキ}（四三〇割注・三三〇割注） 離^{ルキ}（九三六）

冠^{ルキ}—綏^{ルキ}（五七五） 離^{ルキ}（二〇一六）

以上である。右例の多くには、反切・同音字注が付されていることに注目される（ただし、時代が降ると、それが少なくなる）。

また、右の諸本は、清原家・藤原家など、博士家の訓点本である。高山寺に現在蔵されている高山寺蔵『莊子』乙卷南北朝期点も、濁音符の形式から、藤原家の加點かと推定されている。

2. 古辞書

図書寮本『類聚名義抄』

綏^{ルキ}恤^{ルキ}へ順云音与蕤^{ルキ}スキ平声の位置に加色同^{ルキ}（三二一一六）

観智院本『類聚名義抄』

嫫^{ルキ}へ力佳反^{ルキ}（佛中一九一七）

擗^{ルキ}へ音蕤^{ルキ}（佛下本五七一一）

校^{ルキ}へ音蕤^{ルキ}（佛下本八九一一）

尿^{ルキ}略又音離^{ルキ}（法下八九一一）

錐^{ルキ}へ音佳^{ルキ}（僧上一一九一四）

離^{ルキ}へ音佳^{ルキ}（僧中二〇〇一八）

宝菩提院本『類聚名義抄』鎌倉後期写本

柵(ハ音聲) (七〇—一) 桜(ハ音聲) (一〇五—五)

三卷本『色葉字類抄』前田本 寿永年間写本

鉦(ハ音) (ヘキリ 職追反) (下五八ウ一) 蕤(ハ音) (上通) (ヘシヘ 花心

也 如累反) (下六九ウ五) 椎(ハ音) (ヘシヒ 直追反 | 子) (下

六九ウ三) 綏(ハ音) (ヘカフリノオ 又オイカケ) (上九八ウ三)

榎(ハ音) (ハヘキ 垂木也) (上二〇ウ五) 綏(ハ音) (ヘホスケ 冠

| 也 又オイカケ) (上四四ウ六) 騶(ハ音) (馬(ヘニケノムマ)

(上三六ウ六) 騶(ハ音) (ヘカレヒツケ 鞍具) (上二〇〇オ

5) 騶(ハ音) (ヘイリモノ 又作燐煥) (上八オ5) 綏(ハ音) (山

〈杞名 スキサン) (下二二〇ウ4)

三卷本『色葉字類抄』黒川本 江戸中期写本

綏(ハ音) (ヘタラノキ) (中二オ1) 綏(ハ音) (中八六ウ2)

綏(ハ音) (ヘオイカケ) (中六六オ7) 榎(ハ音) (タルキ 垂木也) (中一

ウ1) 推輪(ハ音) (ツキリン 專一詩) (中二八オ7)

世尊寺本『字鏡』鎌倉時代初中期写本

騶(ハ音) (スキ音 止推反 一名祝鳥孝鳥) (第一冊七二オ2)

騶(ハ音) (スキ音 作歎 クシル) (第二冊一九オ2)

東京大学国語研究室蔵『音訓篇立』室町末期写本

の二例を見出せる。この字書には、「憑」に「ヘヨウ」、「饒」に

「シエウ」、「養」に「キウ」、など「奇異な形」が見られ、反切か

ら導き出されたものと疑われている。¹⁵⁾

東京大学国語研究室蔵『音訓篇立』室町末期写本においても、

八〇例のスイの例に対して、スキは、三例である。その他、「ツキ

イ」の例が見られる。この例は、本資料には希な、反切の直後に

書かれている。

3. 字音直読資料

国立故宮博物院蔵本『蒙求』院政後期点

墜(ハ音) (279句目)

文化庁蔵長承三年奥書本『蒙求』鎌倉期点

墜(ハ音) (345句目)

天理図書館蔵本『蒙求』康永四年(一二三四)点

墜(ハ音) (志) (345)

国会図書館蔵『佛母大孔雀明王経』貞応三年(一二二四)頃点

随喜(下43)

『蒙求』におけるツキの例は、「墜」字に限られる。その他、

「水・推・酔・垂・随」は、諸本全例が「イ」表記されている。

なお、右以外の「蒙求」諸本では、「墜」字も、ツイとされて

る。なお、右以外の「蒙求」諸本では、「墜」字も、ツイとされて

る。なお、右以外の「蒙求」諸本では、「墜」字も、ツイとされて

る。なお、右以外の「蒙求」諸本では、「墜」字も、ツイとされて

る。なお、右以外の「蒙求」諸本では、「墜」字も、ツイとされて

る。なお、右以外の「蒙求」諸本では、「墜」字も、ツイとされて

る。なお、右以外の「蒙求」諸本では、「墜」字も、ツイとされて

る。なお、右以外の「蒙求」諸本では、「墜」字も、ツイとされて

る。なお、右以外の「蒙求」諸本では、「墜」字も、ツイとされて

る。なお、右以外の「蒙求」諸本では、「墜」字も、ツイとされて

る。なお、右以外の「蒙求」諸本では、「墜」字も、ツイとされて

る。なお、右以外の「蒙求」諸本では、「墜」字も、ツイとされて

桜(ハ音) (タラノキ 小木也) (天中二一七ウ4)

鴉(ハ音) (ハミ 毒蟲腹也) (天下三三四三オ3)

蕤(ハ音) (メハシキ) (地中五一七オ2)

蕤(ハ音) (メハシキ) (地中五一七オ2)

蕤(ハ音) (メハシキ) (地中五一七オ2)

蕤(ハ音) (メハシキ) (地中五一七オ2)

蕤(ハ音) (メハシキ) (地中五一七オ2)

蕤(ハ音) (メハシキ) (地中五一七オ2)

蕤(ハ音) (メハシキ) (地中五一七オ2)

蕤(ハ音) (メハシキ) (地中五一七オ2)

蕤(ハ音) (メハシキ) (地中五一七オ2)

蕤(ハ音) (メハシキ) (地中五一七オ2)

蕤(ハ音) (メハシキ) (地中五一七オ2)

蕤(ハ音) (メハシキ) (地中五一七オ2)

蕤(ハ音) (メハシキ) (地中五一七オ2)

蕤(ハ音) (メハシキ) (地中五一七オ2)

蕤(ハ音) (メハシキ) (地中五一七オ2)

蕤(ハ音) (メハシキ) (地中五一七オ2)

蕤(ハ音) (メハシキ) (地中五一七オ2)

蕤(ハ音) (メハシキ) (地中五一七オ2)

蕤(ハ音) (メハシキ) (地中五一七オ2)

蕤(ハ音) (メハシキ) (地中五一七オ2)

蕤(ハ音) (メハシキ) (地中五一七オ2)

蕤(ハ音) (メハシキ) (地中五一七オ2)

蕤(ハ音) (メハシキ) (地中五一七オ2)

蕤(ハ音) (メハシキ) (地中五一七オ2)

蕤(ハ音) (メハシキ) (地中五一七オ2)

蕤(ハ音) (メハシキ) (地中五一七オ2)

蕤(ハ音) (メハシキ) (地中五一七オ2)

蕤(ハ音) (メハシキ) (地中五一七オ2)

蕤(ハ音) (メハシキ) (地中五一七オ2)

蕤(ハ音) (メハシキ) (地中五一七オ2)

蕤(ハ音) (メハシキ) (地中五一七オ2)

蕤(ハ音) (メハシキ) (地中五一七オ2)

蕤(ハ音) (メハシキ) (地中五一七オ2)

蕤(ハ音) (メハシキ) (地中五一七オ2)

蕤(ハ音) (メハシキ) (地中五一七オ2)

蕤(ハ音) (メハシキ) (地中五一七オ2)

蕤(ハ音) (メハシキ) (地中五一七オ2)

蕤(ハ音) (メハシキ) (地中五一七オ2)

蕤(ハ音) (メハシキ) (地中五一七オ2)

蕤(ハ音) (メハシキ) (地中五一七オ2)

蕤(ハ音) (メハシキ) (地中五一七オ2)

蕤(ハ音) (メハシキ) (地中五一七オ2)

蕤(ハ音) (メハシキ) (地中五一七オ2)

蕤(ハ音) (メハシキ) (地中五一七オ2)

蕤(ハ音) (メハシキ) (地中五一七オ2)

蕤(ハ音) (メハシキ) (地中五一七オ2)

4. 和化漢文資料

大谷大学図書館蔵『三教指帰注集』長承二年(一一三三)点

股(ハ音) (上末30ウ2)

文化庁蔵半井家旧蔵『医心方』天養二年(一一四五)点

蕤(ハ音) (核) (入聲) (十六16 a 4)

蕤(ハ音) (上) (直危反) (一也) (二34 b 8)

仁和寺蔵『三教指帰』鎌倉初期点

蕤(ハ音) (上7) (股) (蕤) (上133)

久遠寺蔵『本朝文粹』建治二年(一二七六)頃写本

立(蕤) (十三192) [前中書王 發願文]

維(蕤) (二553) [善相公 意見十二箇條]

六地藏寺蔵『江都督納言願文集』永享七年(一一三五)写本

六地藏寺蔵『江都督納言願文集』永享七年(一一三五)写本

六地藏寺蔵『江都督納言願文集』永享七年(一一三五)写本

六地藏寺蔵『江都督納言願文集』永享七年(一一三五)写本

六地藏寺蔵『江都督納言願文集』永享七年(一一三五)写本

日本漢音における止摂合口字音の受容に見られる位相差

二八

葺スナ寶シ(五4ウ8)

六地藏寺藏『文鏡秘府論』室町中期点

葺スナ葺スナ(西51ウ1) 芳スナ葺スナ(南54ウ3)

葺スナ葺スナ(南59ウ3) (北2オ)

現在のところ、わずかな用例しか見出せない。その例は、真言宗仁和寺伝存本『三教指帰』あるいは仁和寺で多用された円堂点加定の『三教指帰注集』と『文鏡秘府論』、藤原行盛・丹波重基の訓点を移点した『医心方』、および清原教隆加差点を移点した久遠寺藏『本朝文粹』と、鎌倉中期の訓点を伝えるとされる六地藏寺藏『江都督納言願文集』に見られる。

5. 和文およびいわゆる和漢混淆文資料

専修寺藏『水鏡』鎌倉中期写本

綴スナ靖スナ(上二二)

蓬左文庫藏『唐鏡』鎌倉末期写本

花スナ蕊スナ(137行目) 翠スナ黛スナ(133行目)

『水鏡』鎌倉中期写本は、漢字平仮名交じり文中の漢字に、片仮名による音注が加えられている。声点の加點も見られる。

用例は、一例のみである。しかし、他の字音「一」についての仮名表記例は、左のごとくであり、止摂合口字に「スキ」が見

られることに、意味があるのではないかと疑われる。

繼スナ體スナ(上八五4) 反スナ正スナ(上六一2)

欽スナ明スナ(中三2) 用スナ明スナ(中三七) 百スナ入スナ濟スナ上スナ國スナ(中六4)

百スナ濟スナ國スナ(中八3) 敬スナ札スナ(中八5) 鴨スナ舌スナ香スナ(中二六4)

内スナ臣スナ(中四四2) など

蓬左文庫藏『唐鏡』も、専修寺藏『水鏡』と同様に、漢字に仮名音注と声点が加點されている。

『水鏡』『唐鏡』ともに加點者は、不明である。しかし、両文献とも、唇内入声字にも、入声点が加點され、「フ」と付音されている。これは、「漢文脈的性格の強い」「位相」の表記法である。

以上、従来指摘されていた「スキ」「ツキ」等の用例に、若干を加えることができた。現在のところ、最古の例は、院政期のものである。院政期には、一般的に「イ」と「キ」とが別の音を示す仮名として機能していた。したがって、スキ等の例は、いわゆる「仮名遣いの混同例」では無い。それは、止摂合口字以外の「体」「明」「来」「例」などを、「タキ・テキ」「メキ」「ラキ」「レキ」などと記した例を全く見出せない点からも知られる。

また、止摂合口字をスキ等とする例は、漢籍訓読資料および辞書に比較的多くを指摘できた。そして、漢籍訓読資料における例

の内、古いものは、反切・同音字注を有する例が多かった。

辞書におけるスキ等の用例中にも、反切を有する例が存した。

また、それらは、正式な音注を記したと考えられる位置に存し、量字・熟字の音を示す場合にはほとんど見られないことも指摘できた。

これらの事実から、字音直読資料『蒙求』・『佛母大孔雀明王經』にスキ等の例が希なのは、それらに反切・同音字注が多くなっていたためであろう、と考えられる。『蒙求』のような字音直読資料は、辞書・音義や漢籍訓点資料と比した場合、「和化を最も早く蒙った資料群に属するものである」ことも言われている。

よって、止摂合口字をスキ等とすることは、反切・同音字注に支えられた規範的な表記であったといえるであろう。和化漢文資料・いわゆる和漢混淆文資料の訓点に見られるスキ・ユキは、その規範的な表記が、一部に取り込まれたものと考えられる。

三、シキ等の用例

1. 漢籍訓読資料

神田本『白氏文集』一一一三年点

推スナ一スナ警スナ(四18)

東洋文庫藏『史記』夏本紀二〇一〇〇嘉応二年(二七〇)点

日本漢音における止摂合口字音の受容に見られる位相差

2. 古辞書
東京大学国語研究室藏『法華經音義』(明覚三藏流) 室町時代中期写本

垂スナヘスナ子スナ四スナ反スナ タレタリ イマ<>(四ウ2)

衰スナヘスナ所スナ類スナ ヲトロフ(七オ2)

3. 字直読資料

天理図書館藏本『蒙求』康永四年(二三四五)点

墜スナ(去)(279)

4. 和化漢文資料

『文鏡秘府論』保延四年(一一三八)点

蕤スナ(南96・104・北74)

5. 和文およびいわゆる和漢混淆文資料

親鸞遺文『西方指南抄』の例を左に掲げる。

水波スナ(下末135) 水想スナ(中本4・5) 没水スナ(上末52)

水路スナ(上末104) 四大海水スナ(上末6) 池水スナ(上末19)

以上、シキ等の例は、さらに例数が少なくなる。そして、例を

見出せた文献は、スヰ等が見られる文献とほぼ重なる。

そのような中で、親鸞遺文における「水」が注目される。これについては、高松政雄「呉音」の中の異形——真宗伝承音より——(一九七八年)において、中国語原音の介母を「可能な限りにおいて忠実に受け入れたもの」という解釈がなされている。

親鸞の「水」は、頭音sをシで仮名書きし、シヰによって、「[sɛi]」の音を示そうとしたものであろう。仮名書きする以上、子音の後に母音が入る。その母音に、もつとも聞こえの弱いiを選んだものと考えられる。舌内入声の主表記に「チ」を選んだ親鸞らしい選択である。そして、親鸞自身は、おそらく、中国語原音に近く発音する場合があったものと思われる。

なお、シヰ等は右のとおり少数例であるため、以下の記述では、「スヰ等」の言い方で、シヰ等をも含むこととする。

四、スヰ・シヰ等の出現状況

1. スヰ・シヰ等が見られない文献

右に見てきたとおり、スヰ等は、例外的な存在である。しかし、それが出現する文献は、反切・同音字注に支えられた規範的な音注を施すものが中心であった。

ここで、さらに多くの文献における状況を見てみたい。

である(止撰合口字に対する仮名表記例自体が見いだせない)。

この状況から、スヰ等の表記が、それまで反切・同音字注で音を示していたものを仮名表記する際に、さまざまに試行された跡であったことが推測される。

そして、止撰合口字をスヰ等と仮名表記する早期の例が、僧侶の手になる文献であることも注目される。おそらく、博士と比して革新的な僧侶が「スヰ」を使い始め、博士もそれを取り入れた、という流れなのであろう。

3. スヰ・シヰ等が見られる文献における他の表記例

ところで、これまで見てきたスヰ等の用例が存する文献には、スイ等の仮名表記が存しないのではない。むしろ、スイ等の方が一般的である。次に、その若干例を挙げる。

書陵部蔵金沢文庫本『群書治要』建長六年(一二五四)頃点

瘁スヰま ―、(三三〇六) 四―垂スヰ (六五七割注) 骨―髓スヰ (三〇四五) など。

書陵部蔵『春秋経傳集解』文永六年(一二六八)点

帥スヰへ所類反(三三〇四三) 率スヰまへ所類反(三三〇四七)

雖スヰへ音佳(一一二四二) 壘スヰへ力軌反(三三〇八〇) など。

よって、同一資料内に、スヰ・スイが混在している。そのた

スヰ等の用例が見えはじめる院政期とそれに続く鎌倉期を中心に、止撰合口字音に対して、当該文献にスヰ等の表記例が存するか否かを、後掲の「別表」に一覧する。別表には、牙音字以外の止撰合口字に仮名音注が存する資料のみを掲げた。表では、スヰ等が存する資料に○、存しない資料(すなわち、スイ等しか見られない資料)に、×を記した。

「別表」は、文字通り管見の範囲におけるものである。その範囲で、スヰ等の例は、すでに指摘されていたとおり、漢音読資料を中心に見られ、呉音読資料には一般的に見られない。また、和文資料にも、例を見出せない。

ここで、スヰ等が見られない文献を含め、資料を一覧したことによって、スヰ等が反切・同音字注にもとづく規範的な表記であることを確認できた。

2. 初出例が院政期である理由

今後、止撰合口字をスヰ等と仮名表記する平安時代の用例が見つかる可能性はある。しかし、多くは期待できない。

なぜならば、スヰ等が見られた、反切・同音字注を有する文献群では、平安時代においては、字音注を仮名表記することが希だからである。「別表」に、平安時代の漢籍が少ないのは、そのため

め、単なる仮名遣いの揺れであるという説も出てくる。

だが、既掲の文献中、「スヰ」「ルヰ」等が見られる例は止撰合口字ばかりであり、止撰開口字「伊・倚・意」などを「ヰ」とすることは無い。逆に、止撰合口字の「委・為・韋・圍・帷」などを「イ」とすることも、鎌倉時代中期以前においては、一般的でない。

よって、いわゆるハ行転呼音現象を起こした後の、和語の仮名遣いと同列には扱えない。

五、スヰ・シヰ等の発音

1. 音価の推定

では、そのスヰ等で表記された字音の、実際の発音は、どのようなものだったのであろうか。この決定は、困難である。

そこで、日本漢字音史上に類例を求めてみる。

すると、臻撰合口舌歯音字(屯・黜・春・出など)の仮名遣いが、やはり漢音資料において、「スヰ」「シヰ」「シユ」等でゆれていることが想起される。

これについて、沼本克明は、「漢音資料において「スヰ」「シヰ」「シユ」などが混在するのは正にその原音の[sɛi] [ɛi] [ɛi]を正しく表記しようとした結果であらう」と述べている。

本稿で問題としている止撰合口字も、同一資料において、場合によっては同一字でも、「スイ」「スキ」「シキ」等、各種の表記で揺れている。具体例は、すでに掲げたとおりである。

また、これまで省略してきたが、止撰合口字をスキ等で表記した例が存する文献は、必ず、臻撰合口舌歯音字をも、スキー等で表記する例を持つ。

一例として、『文鏡秘府論』保延四年(一一三八)点の用例を掲げる。

聞(天17) 潤(北51・南87) 舜(北40) 瞬(南94)
脣(南104) 荀(地75・南4) 述(東19)

このような例を見ると、止撰合口字におけるスキ等の表記も、中国語原音の介音wを表すための工夫であったと考えられる。

なお、スキ等が見られた書陵部蔵『群書治要』建長六年(一一二五)四)頃点および書陵部蔵『春秋経傳集解』文永六年(一一二六)八)点には、「人為的漢音」が存することを述べたことがある。

すなわち、これまで指摘してきた「スキ」「ツキ」「ルキ」などの表記が見られた文献は、反切・同音字注に基づく「人為的漢音」が見られる文献と、基盤を同じくすると見られる。

よって、この「スキ」「ツキ」などの表記も、日本語音「スイ」「ツイ」とは異なる中国語原音に近い発音を示すための努力であ

ったものと考えられる。

キの頭音wは、現実の発音においては、前接のuに吸収されることが多かったであろう。しかし、反切・同音字注を拠る所に、中国語原音に近い発音の実現が試みられることがあったと思われる。

2. 合口を強調する発音の広がり

中国語原音に近く合口を保持した発音が行われる場合があったとして、それは、どの程度の広がりを持っていたであろうか。

同じく止撰合口字であっても、牙音字は、「クキ」の表記で安定した時期があることから、『文鏡秘府論』の合拗音が日本語に定着していたと考えられる。しかし、スキ等の例は、クキほど多くは見出せない。

また、「クキ」(ㄑㄩㄎㄩ)の合拗音は、日本語音韻史上、合拗音が失われた結果、「キ」(ㄑㄩ)に変化した。しかし、「スキ」は「スイ」となり、「シ」とはならなかった。

これらの点から、「スキ」等で表記し、合口を強調する発音は、一部の学識者において行われたもので、日常的な音にはなっていないと考えられる。

六、結び

本稿における検討の結果、次の点が知られた。

院政期以降、スキ等が見られる資料は、反切による人為的漢音が存する漢籍訓読資料および辞書が中核をなす。このことから、これらの表記は、中国漢字音の高度な学習に裏付けられた規範的な表記であると考えられる。

そして、スキ等と表記されたのは、中国語原音の合口をより良く表記するためであり、その表記者あるいはそれと同程度の学習を積んだ者は、漢籍・辞書等の漢字を音読する際、中国語原音に近い発音を実現する場合があったのではないかと考えた。

このように考えることが許されるならば、同時に、日常的な漢字音にあつては、止撰合口字音は合口性が失われ、文字通り、スキ・ツイと発音されていたであろうと推測されることになる。

はじめに、先行研究において、日本漢字音における止撰合口字音の推定音価が分かれていることを見た。しかし、本稿の検討結果によれば、そのどちらも当たっていたことになる。ただ、それぞれの音が実現された位相が異なっていたと考えられる。

〈注〉

- (1) 満田新造は、注(3)論文において、「スキ」「ツキ」等の仮名遣いをはじめ主張したのは、宝暦四年(一七五四)の文雄「和字大観抄」であり、本居宣長がこれを襲用したために、この仮名遣いがひろまった、としている。
- (2) 『韻鏡考』七八・七九頁、「止撰合音には必ずスキ、ツキなどすべし」といひて蟹攝の合音をスキ、タキとすべしと言はざるは何故にか」の項目。
- (3) 満田新造「スキ」「ツキ」「ユキ」「ルキ」の字音仮名遣いは正しくらず(『國學院雑誌』第二十六卷第七号、一九二〇年七月。後、『中国音韻史論考』八一九六四年、武蔵野書院)に所収。他に、春日政治『西大寺本金光明最勝王經古点の国語学的研究 研究篇』五七頁。大坪併治「調点資料の研究」三七〇頁、築島裕「興福寺本大慈恩寺三蔵法師伝古点の国語学的研究 研究篇」(一九六七年、東京大学出版会)一六六頁、同「平安時代語新論」(一九六九年、東京大学出版会)四一一―四三三頁。沼本克明「平安鎌倉時代に於ける日本漢字音に就ての研究」(一九八二年、武蔵野書院)一一三三頁、同「日本漢字音の歴史」(一九八六年、東京堂出版)二八九頁、などがある。
- (4) 沼本克明「Sino-Japanese kana Usage」[FACTA ASIATICA] 65(一九九三年八月)所収。後、「字音仮名遣いについて」として、築島裕編『日本漢字音史論叢』(汲古書院、一九九五年)に、日本語に書き直されて収載。引用は、後者に依る。また、小林芳規「調点における拗音表記の沿革」(『王朝文学』第九号、一九六三年十月)でも、本稿で問題としている諸字については、多数の調査文献において、「スイ」で表され異同がない」と記す。さらに、築島裕「五行大義元弘本の調点」(『古典研究会叢書漢籍部』8「五行大義」(二)一九九〇年、汲古書院)所収)にも、「止撰合音の字の首尾は、以前の歴史的な字音仮名遣では「スキ」としてゐたが、本書ではすべて「スイ」と記してゐる。

これは、平安時代以来の古点本に、殆ど例外無しに見られる現象であることは、いふまでもない。」という記述がある。

(5) 『岐阜大國語国文学』十二号、一九七六年二月。後、『日本漢字音の研究』(一九八二年、風間書房)に所収。

(6) 太田次男・小林芳規『神田本白氏文集の研究』(一九八二年、勉誠社)の小林芳規「訓読文補註」参照。

(7) 沼本克明『日本漢字音の歴史』、一七九頁。

(8) 築島裕「静嘉堂文庫蔵毛詩鄭箋古点解説」(『毛詩鄭箋』(三)(一)一九九四年、汲古書院)所収。

(9) 高松政雄も、注(5)論文で、止摂合口舌歯音字は、「スィー」「ツイ」「イ」と二音節的に把握されたであろう」とし、歯音字の音を「ス」と示している。

(10) 『日本語書記史原論』(一九九八年、笠間書院)二〇・二二頁。

(11) これと同様の記述は、『言語学大辞典』第六巻「術語編」(一九九六年、三省堂)での「字音仮名遣」の項(625頁)にも見られる。項目記述者名は記されていないが、おそらく「執筆者」一覽に名の挙がる小松英雄による記述であろう。原本横書きを縦書きに改めて引用する。

「スイ」という表記は、合口(一)開合の介音「ス」を「ス」の仮名に含めた表記であり、それが平安末期から「スヰ」に転じたのは、子音だけを「ス」の仮名で代表させ、介音「ス」を「ヰ」の仮名に含めて表わすようになったためであって、転写方式の転換によるものである。サ行子音を仮に「[S]」で表わすなら、「[S]」から「[Sヰ]」への転換である。

(12) 築島裕・石川洋子「山岸文庫蔵『史記』孝景本紀第十二「影印」(『実践女子大学文学芸資料研究所 別冊 年報』I(一九九〇年二月)に依る。本資料には、古記伝点が加添されている。

(13) 小林芳規『平安鎌倉時代に於ける漢籍訓読の国語史的研究』(一九九七年、東京大学出版会)一三〇〇頁、参照。

(14) スヰチ・スミン・ツキンにもこの傾向がある。いま、高山寺本・西念寺本『類聚名義抄』の例を掲げる。

高山寺本『類聚名義抄』

畝(上二六〇五)

洵(音峻)(上三〇〇七)

過(音峻)(上三〇ウ4)

洵(音峻)(二ウ1)

洵(音峻)(二九ウ2)

巡(音旬)(二九ウ6)

循(音巡)(二八ウ3)

(15) 築島裕「東洋文庫蔵『字鏡』世尊寺本」解題(『古辞書音義集成』第六巻)(一九八〇年、汲古書院)所収。

(16) 一九九一年刊行のオリエント出版複製本に依る。所在も、この複製本の方式による頁数と行数である。

(17) 月本雅幸「解題」(『六地藏寺善本叢刊』第七巻)一九八四年、汲古書院)によれば、本書は、鎌倉時代中期の訓点を伝えるという。なお、本書の声点は、この期には、原則として見られない六声体系で加添されている。佐々木勇「日本漢音における軽声の消滅について——漢籍を資料として——」(『鎌倉時代語研究』第二輯、一九九八年五月、参照)。

(18) 沼本克明『日本漢字音の歴史的研究』(一九九七年、汲古書院)第五章第一章、参照。『水鏡』の作者は藤原親忠かとされ、『唐鏡』は紀伝道の文章博士藤原茂範作である。

(19) 注(3)沼本著書前者、八一九頁。

(20) 例が少ない理由は、不明である。あるいは、「シー・チイ」等の母音長音化例との差がわかりにくいために避けられたものであろうか。

(21) 吉沢義則「教行信証の訓点は坂東語か」(『龍谷大学論叢』一九三三年四月)など、参照。

(22) しかし、現在の浄土真宗では、「[三]」と読んでいる、という。福

永静哉「浄土真宗伝承音の研究」(一九六三年、風間書房)三三七頁、参照。後の、福永静哉「浄土真宗伝承読誦音概説」(一九九七年、永田文昌堂)三〇七頁にも同様の記述がある。親鸞存命当時から、門徒であつても、原音の合口を再現しようとした者と、直音で発音する者といふのではなからうか。

(23) ただし、小倉肇「日本呉音の研究 索引篇」によれば、スヰが、近世初期写本京大本『法華経音義』元和三年(一一七一)写本『法華経音義』卷末『法華経品々両音字少々』に、それぞれ三例ずつ有り、ツヰは、京大本『法華経音義』に一例見られる。しかし、この京大本『法華経音義』には、「海カヰ」「妻サヰ」等も存する。元和本『法華経音義』にも「太タヰ」「彩サヰ」等が存する由である。これらの音義におけるスヰ等の表記は、本稿で問題としている止摂合口字に限ったことではない。よつて、八行転呼音現象以後の和語における仮名遣いの問題と等しい。この点が、漢音説主体資料における用例と、大きく異なる。

(24) 注(13)小林著書、七七・七八頁には、「博士家に比べて僧侶は新要素を反映し易い状態にあつた」ことが説かれている。また、同書六八頁には、僧侶による漢籍の加点は、真言宗の僧に多いことが指摘されている。なお、和化漢文においても、たとえば、半井家旧蔵「医心方」の訓法は、助字の訓法について、比較的「新しい訓法、仏家色の訓法」であることが指摘されている(松本光隆「書院部蔵医心方の訓

法——助字の訓法を中心として——」(『鎌倉時代語研究』第二輯、一九七九年三月)。

(25) 沼本克明「臻摂合転舌歯音字の仮名遣に就て」(信州大学人文科学論集)第一四号、一九八〇年三月。後、注(3)沼本著書前者に修正の上、所収。引用は、後者による。

(26) 佐々木勇「日本漢音における反切・同音字注の仮名音注・声点への反映について——金沢文庫本『群書治要』鎌倉中期点の場合——」(『国語学』第五三巻第三号、二〇〇二年七月、参照。左に、その類例を、蓬左文庫蔵『毛詩』室町末期点から掲げる。

副(一七二1・二〇97割注) 敦(一七76) 澁(二二193)

(27) このような発音がなされたとして、いつまで保持されたものか不明である。スヰ等が見られる文献においても、時代が降った室町期点では、反切・同音字注が省略される場合が多い。その時点では、単に「仮名遣い」として引き継いでいるだけかも知れない。

(佐々木)いさむ・広島大学大学院助教授

〔付記〕本稿は、平成十五年度広島大学国語国文学会秋季研究集会における口頭発表をもとに成ったものです。席上、松本光隆氏・山本秀人氏にご教示頂きました。ここに明記し、感謝申し上げます。

別表

スナ等	加点点代	所蔵	書名	加点点者
×	794	小川広巴	新撰華嚴經音義私記	(不明)
×	平安初期	聖語藏ほか	願經四分律	(不明)
×	平安初期	西大寺	金光明西勝王経	(不明)
×	平安初期	知恩院	大唐三藏玄奘法師表啓	(不明)
×	858	石山寺ほか	大智度論	(不明)
×	883	聖語藏・東大寺図書館	地藏十輪經	(不明)
×	904頃	興福寺	日本靈異記	(不明)
×	948	上野精一	漢書楊雄伝	藤原良佐
×	平安中期	文化庁	蒙求	(不明)
×	平安中期	石山寺	沙彌十戒威儀經	(不明)
×	平安後期	醍醐寺	妙法蓮華經釈文	眞興か
×	平安後期	楊守敏旧蔵	将門記	(不明)
×	平安後期	最明寺	往生要集	(延暦寺の僧か)
×	1073	東北大学	史記 季文本紀	大江家国
×	1080頃	興福寺	大慈恩寺三蔵法師伝	(法相宗僧)
×	1082	高山寺	大毘盧遮那經疏	(不明)
×	1099	真福寺	将門記	(不明)
×	1099	興福寺	大慈恩寺三蔵法師伝	(法相宗僧)
○	院政期	書院部	類聚名義抄	(法相宗僧)
×	院政期	高山寺	三教指帰 卷中	(不明)
×	院政期	高山寺	北斗祭文	(不明)
×	1100	興福寺	高僧伝 卷第十三	(法相宗僧)
×	院政期	高山寺	佛母大孔雀明王経	(不明)
×	院政期	高山寺	佛母大孔雀明王経	(不明)
×	院政期	安藤積産合資会社	諸仏菩薩釈義	(不明)
×	1104	高山寺	大毘盧遮那經疏	行證か
×	1105頃	尊経閣文庫	冥報記	(不明)
×	1111頃	高山寺	秘密漫茶羅十住心論	(不明)
×	1113	高山寺	胎藏界自行次第	(真言宗仁和寺僧か)
○	1113	神田嘉一郎	白氏文集	藤原茂明
×	1116	興福寺	大慈恩寺三蔵法師伝	(法相宗僧)
×	1120	名古屋博物館	三宝絵	(不明)
×	1122	大東急記念文庫	佛母大孔雀明王経	(不明)
×	1123	榮島裕	辨正論 卷第三	寛印
×	1123	大東急記念文庫	辨正論 卷第二	静因
×	1126	国会図書館	大慈恩寺三蔵法師伝	(法相宗僧)
○	1127	山岸文庫	史記	(不明)
○	1133	大谷大学図書館	三教指帰注集	敬寛
○	1134	文化庁	蒙求	珠兒
○	1138	書院部	文鏡秘府論	(不明)
○	1145	文化庁	医心方	藤原忠光ほか
○	院政後期	国立故旧博物院	蒙求	(不明)
×	1158	東大寺図書館	新修浄土往生伝	弁昭
×	院政後期	最明寺	往生要集	(延暦寺の僧か)
×	1170	興福寺	大慈恩寺三蔵法師伝	(法相宗僧)
○	1170	東洋文庫	史記 夏本紀・秦本紀	(不明)
×	院政末期	高山寺	佛母大孔雀明王経	(不明)
×	院政末期	東寺觀智院	佛母大孔雀明王経	(不明)
×	院政末期	東寺觀智院	佛母大孔雀明王経	(不明)
×	院政末期	東寺觀智院	佛母大孔雀明王経	(不明)
×	院政末期	中法華経寺	三教指帰注	(不明)
×	院政末期	藤田美術館	阿字義	(不明)
○	1182頃	尊経閣文庫	色葉字類抄	(不明)
×	1186	高野山西南院	和泉往來	(不明)
×	1195	猿投神社	古文孝経	契真法師
×	1197	仁和寺	佛母大孔雀明王経	(不明)
×	1211	高山寺	史記 放本紀	(不明)
×	1215	大東急記念文庫	如來遺跡講式	明恵ほか
×	1217	真福寺	本朝文粹 卷十四	(不明)
×	1223	京都大学人文科学研究所	大慈恩寺三蔵法師伝	弁濁
×	1223	京都大学人文科学研究所	大唐西域記	(法相宗僧)
×	1229	高山寺	新訳華嚴経	良照・丹弁ほか
×	1229	大東急記念文庫	光明真言土沙動進記	明恵ほか
○	鎌倉初期	仁和寺	三教指帰	(不明)
×	鎌倉初期	高山寺	古往來	(不明)
×	鎌倉初期	天理図書館	大鏡(十巻本)	(不明)
×	鎌倉初期	東寺觀智院	佛母大孔雀明王経	(不明)
×	鎌倉初期	京都御所	更級日記	藤原定家
×	鎌倉初期	京都女子大学図書館	佛母大孔雀明王経	(不明)
×	鎌倉初期	天理図書館	世俗語文	(不明)
×	鎌倉初期	本願寺	仮名書き無量壽経	恵信尼
×	鎌倉初期	高山寺	論語	(不明)

×	鎌倉初期	最明寺	宝物集	(不明)
×	鎌倉初期	東京大学国語研究室	佛母大孔雀明王経	(不明)
×	鎌倉初期	東寺觀智院	佛母大孔雀明王経	(不明)
×	鎌倉初期	高山寺	史記周本紀	(不明)
×	鎌倉初期	学習院大学	伊呂波字類抄	(不明)
×	1274	上野学園日本音楽資料室	維摩会表白	尊信
×	1249	仁和寺	無常講式	(不明)
×	鎌倉初期	文化庁	栄華物語(梅沢本)	(不明)
×	鎌倉初期	書院部	宝物集	(不明)
○	鎌倉初期	東洋文庫	字鏡	(不明)
○	鎌倉初期	専修寺・東本願寺ほか	親鸞遺文	親鸞
×	1252	大東急記念文庫	白氏文集	豊原奉重
×	1253-1257	書院部	群書治要 経部	清原教隆
○	1260	書院部	群書治要 子部	清原教隆
○	1268	東洋文庫	論語 卷八	中原師秀
○	1268・1269	書院部	春秋経傳集解	清原直隆・俊隆
×	1269	随心院	往生講式	(不明)
×	鎌倉中期	書院部	群書治要 後漢書	北條実時
×	鎌倉中期	書院部	群書治要 魏志	(不明)
×	鎌倉中期	仁和寺	十八道初行表白 乙本	(不明)
×	鎌倉中期	天理図書館	釈迦如來念誦次第	(不明)
×	鎌倉中期	身延文庫	和夷朗詠註抄	(不明)
○	鎌倉中期	専修寺	水鏡	(不明)
○	鎌倉中期	金沢文庫	佛母大孔雀明王経	(不明)
×	鎌倉中期	東京大学国文学研究室	玉造小町子形表記	(不明)
×	鎌倉中期	天理図書館	本朝文粹 卷第十三	(真言宗僧)
×	鎌倉中期	京都女子大学図書館	佛母大孔雀明王経	(不明)
×	鎌倉中期	聖語藏	蒙求	(不明)
×	鎌倉中期	お茶の水図書館	文鏡秘府論	(不明)
×	鎌倉中期	仁和寺	佛母大孔雀明王経	(不明)
×	鎌倉中期	東寺觀智院	佛母大孔雀明王経	(不明)
×	1275・1276	書院部	群書治要 漢書	北條実時
○	1276頃	久遠寺	本朝文粹	(不明)
×	1276	書院部	群書治要 史記	(不明)
×	1277	三千院	古文孝経	金王廣
×	1280	真福寺	本朝文粹 卷十四	(不明)
×	1281	早稲田大学図書館	尾張国解文	(不明)
○	1282	東大寺	帝範	菅原資方
×	1295	専修寺	普信聖人親鸞傳繪	寛如
×	1301	尊経閣文庫	釈日本紀	下野義永
×	1302	猿投神社	文選	(不明)
×	1302	専修寺	遺撰本願念佛集(延書本)	(不明)
×	1303・1304	書院部	尚書正義	仏師圓種
×	1303	高山寺	論語 卷四・八	了馨
×	1306	書院部	群書治要 晋書	北條貞顕
×	1308	東洋文庫	古文孝経	(不明)
×	1308	醍醐寺	本朝文粹	(不明)
×	1309	龍門文庫	佛母大孔雀明王経	阿闍梨頼深
×	1309	仁和寺	秦中吟	阿闍梨祐忠
×	1311	東京大学史料編纂所	尾張国解文	(不明)
○	1315	東洋文庫	論語	(不明)
○	鎌倉後期	書院部	群書治要 吳志	清原隆重
○	鎌倉後期	天理図書館	類聚名義抄	(真言宗小野流僧)
×	鎌倉後期	書院部	群書治要 蜀志	清原隆重
○	鎌倉後期	宝菩提院本	類聚名義抄	(不明)
○	1321	金剛寺	遊仙窟	(不明)
○	1321	国立国会図書館	佛母大孔雀明王経	金剛法師□□
×	1323	天理図書館	古文尚書	藤原長頼
×	1325	真福寺	尾張国解文	(不明)
×	鎌倉中後期	高山寺蔵	佛母大孔雀明王経	(不明)
×	1330	東洋文庫	古文尚書	中原康隆
×	鎌倉中後期	東洋文庫	蒙求	(不明)
×	1333	龍久彌文庫	五行大義	僧智圓相伝
×	鎌倉末期	天理図書館蔵	蒙求	道順
○	鎌倉末期	蓬左文庫	唐鏡	(不明)
○	鎌倉末期	東京国立博物館	法然聖人傳繪	(不明)
○	1337	大東急記念文庫	論語 卷一〜六	清原頼元
○	1342	大東急記念文庫	論語 卷七〜十	清原良兼(真性)
○	1345	天理図書館	蒙求	直範
×	鎌倉末〜南北朝	六地藏寺	遍照発願性靈集	(不明)
×	1352	猿投神社	白氏文集	沙門淨盛
×	1353	猿投神社	白氏文集	千若丸
×	1354	天理図書館	古文尚書	喜久寿丸